

「いやなもの」についての臨床心理学的考察

— PAC分析を用いた検討から —

岩城 晶子

I. 問題

1. はじめに

「いや」とは日常の中にありふれた、とても馴染みの深い言葉である。「いや」という言葉で表現されるものは多様にあり、そこには使い手の様々な感情が込められる。例えば、「いやな予感がする」という時には「いや」は何か不気味な印象を我々に連想させるし、注射を受ける場面で子どもが発する「いや！」からは恐怖や拒絶の思いが汲み取れる。何とも言いがたいような拒否感を込めて、誰かを「いやな人」と呼ぶこともあるだろう。

心理療法の場にも、様々な「いやなもの」が現れる。それはクライアントがなくなってほしいと望む「症状」や、おそろしい夢、どうしても好きになれない人の話かもしれないし、あるいは入室や語ることへの「拒否」かもしれない。それに、セラピストが「いやな人」だと感じられることもあるだろう。何かを「いや」と感じる心の動きは主観的なものであるから、「いやなもの」にはその人らしさが表れるといえる。

山中(1978)は、趣味として現れるようなクライアントの興味の志向性には、クライアント本人の内界の発達や変容の状態が明確に現れているとし、「窓」という言葉で表現した。このように、クライアントの「好きなもの」を、その人の内界に接近する糸口として理解しうるのであれば、「いやなもの」もまた、クライアントに近づくための窓となるのではないだろうか。このような意識のもと、本論では「いやなもの」をテーマとして、臨床心理学的観点から検討したい。

2. 心理臨床の中での「いやなもの」

「いやなもの」が、心理臨床やそこでのクライアント理解について重要な糸口になる可能性がある一方で、「いやなもの」そのものを研究主題とした先行研究は見当たらない。これはそもそも「いや」ということばが多義的であるためと考えられる。よっていかなるものを「いやなもの」として定めるかにあたり、「いや」が外界の事物、他者、そして自分自身に向けられる例として、恐怖症、影、自己嫌悪の3つを手掛かりとしたい。第1に、一般には恐れられていない事物や場面に対して、不合理だと自覚しながらも、激しい恐怖を抱くとき、それを「恐怖症」として理解することができ、その対象は、虫や動物、人間、特定の場所、不潔や病気に関するものなど多岐にわたるのが特徴である。Freud(1926)は、恐怖症においては、攻撃衝動や不安を投影によって防衛し、それによって真の恐怖の対象を回避しようとする心の動きが生じていると考えた。つまり、恐怖症において恐怖の対象となった外界の事物は、個人が自らの心の中に受け入れがたい情動を投射した結果、「いやなもの」となったと理解できる。第2に、特に理由は無いがどうしても好きになれないような人がいるとき、それを「影」という概念から理解することができ

る。「影」とは、Jung によって提唱された元型のひとつで、「影」は様々な元型の中でも、とりわけ個人的な心的内容と関連が深く(Jung, 1951)、個人の「自我人格の全体を挑発する道徳的問題」であるために、その影の存在を認め、自らの意識の中に組み込むことは非常に困難であり、強い抵抗によって外界に投影される(Jung, ibid)。例えば河合(1967)は、先に述べたような「虫が好かない人」は、この「影」が外部の他者に投影された結果、「いやなもの」として認識されるのだと説明している。第 3 に、自分自身に向けられた「いや」という感情として、自己嫌悪がある。自己嫌悪とは「客観的事実はどうであれ、否定的な感情や事象が自分自身に由来するし、自分が自分自身のことをいやだと感じること」だと定義されるが(水間, 1996)、青年の自己嫌悪感については、時に自殺を誘因してしまうような大きな苦痛をともなうけれども、一方で自己確立に貢献する自己嫌悪の仕方もあると指摘されており(荻野, 1978)、必ずしもネガティブな側面だけを持っているわけではないようである。このように、「いや」だと感じられる対象が外界の事物や人物、あるいは自分自身のいずれの場合であっても、それを嫌悪するその人自身とのつながりが存在している。

しかし、これらの「いやなもの」は、個人の心の安定にとって脅威となるために、そのままにしておくのではなく、何らかの形で「変化」することが目指されるのではないだろうか。例えば恐怖症に対しては、抑圧されている心的内容を意識化したり、恐怖対象による刺激を鈍化させるために、何度も恐怖対象に曝露したりするという手立てが取られる。また、影の場合は、ユング心理学が究極的に目指すところである自己実現の過程の中で、非常に困難ではあるが自分の一部として意識の中に統合することが目標とされる。そして、自己嫌悪は、その否定的側面だけに注目するのではなく、いかにして自己形成へとつながっていくのかについて研究がなされ、その肯定的側面に目が向けられている(水間, 2003)。これらのような「変化」とは、「いやなもの」そのものを消滅させたり変えたりするのではなく、それを嫌悪する個人が、自ら受け入れがたいものとの関係を新たにどのような形で構築するかという作業だともいえるだろう。これは、多くのクライアントがもつテーマに重なることではないだろうか。

II. 目的

このような問題意識に基づき、本論では「いやなもの」を、個人にとって受け入れがたい心的内容が投影されたものであり、それによって恐怖や不安、その他の否定的な情動が喚起される対象や事象であると定義する。また、「いやなもの」と個人との関係において、その捉え方の変化が一つの重要な視点となることを踏まえ、本研究の目的を次のように定める。すなわち、「いやなもの」を主題とした調査面接の中で、そのイメージ構造に変化がみられた事例を検討素材とし、①個人にとっての「いやなもの」がどのようなものであるのか、そのイメージ構造を明らかにすること、②「いやなもの」によって表現されているテーマについて検討すること、③「いやなもの」のイメージ構造に変化が生じたとき、そこではどのような心の動きが生じているのかを明らかにすることを本研究の目的とする。

III. 方法

1. 方法の検討

「いやなもの」は、個人が受け入れがたい内容を反映しているために、聴き取りという手法だけでは、想起や解釈の段階で心理的な抵抗が生じることや、語りの中でイメージ構造に迫ることが困難である可能性が考えられた。これらの点を考慮し、調査手法として内藤(1993)の開発した PAC 分析を用いた。

これは、当該テーマに関する自由連想(アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被検者自身によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、検査者による総合的解釈を通じて、個人の態度やイメージの構造を分析するものである(内藤,1997)。PAC 分析は、クラスター分析という操作的な統計的手法を用いるのと同時に、被検者自身にクラスター構造の解釈を求める点を特徴とし、「特定の具体的な個人」の態度やイメージという主観的世界に迫ることができる。また、自由連想段階において、個人内のコンプレックス等の潜在的構想を探ることも可能であるとされており(内藤,1997)、聴き取りだけでは捉えがたいと予想される「いやなもの」のイメージ構造にせまるという、本研究の目的に適していると考えられた。PAC 分析は、「孤独感」(内藤,1993)、「性の欲求と行動」(内藤,1994)、「死生観」(長田ら,1998)、「遺伝子」・「遺伝」に対するイメージ(駿地,2006)など、様々なテーマを扱った研究で用いられている。また、実際のカウンセリングにおいて PAC 分析を用いた事例も報告されており、臨床場面で PAC 分析が有効に機能することも明らかにされている(井上,1998)。

2. 調査協力者および調査期間

大学院生 A(25 歳、男性)の協力を得て、2010 年 11 月から 12 月にかけて 2 回調査を実施した。

3. 手続き

調査は筆者が行い、土田(2008)による PAC 分析支援ツール¹を使用した。まず、口頭で「あなたには『どうしてもいやなもの』や『どうしてもいやなこと』はありますか?それはどんなものですか?どんなことでですか?どんな感じがするでしょうか?頭の中に浮かんだイメージや言葉を、思い浮かんだ順にカードに書いて下さい。」と教示し、白紙カードと黒サインペンを渡して自由に記述してもらった。次に、書かれた項目を重要な順番に並べかえ、順位をつけてもらった。そして、パソコンを使って項目を 2 つずつランダムに提示し、各項目から協力者が受ける感じやイメージに基づいて、項目間の類似度を“最も似ている”から“最も似ていない”までの 10 段階で評定してもらった。そのデータをもとにウォード法でクラスター分析を行い、結果を樹形図として表した(図 1)。この図を参照しながら、協力者自身にクラスターのまとまりを見つけてもらい、各クラスターについて解釈してもらった。

調査は 2 回に分けて行い、1 回目(以下、#1)は自由連想から各クラスターの解釈までを行った。2 回目(以下、#2)に協力者に対してクラスター構造を確認したところ、前回とは異なる分類をしたため、改めてクラスターの解釈をしてもらった。なお、#1 と #2 の間は 1 週間であった。

IV. 結果

1. クラスター分析の結果

連想時間は 22 分、連想語数は 15 語であった。#1 では、c1～c7 までの 7 つのクラスターに分類されたが、#2 では c1 と c2、そして c4～c6 がまとまり、全部で 4 つのクラスターに再編された(以下、C1～C4 とする)。A は #2 のクラスターがより「しっくりくる」と報告したため、そのクラスター分けを採用した。

¹土田(2008)が作成した、PAC 分析の自由連想からクラスター分析までの手順をパソコンで行うためのプログラムである。

2. A 自身によるクラスター構造の解釈

A がクラスターを解釈する過程を以下に示す。地の文は A の言葉、〈〉内は筆者の言葉、()内は筆者による補足である。なお、クラスターごとに#1 と#2 での解釈を並べて提示する。

(1)各クラスターについての解釈

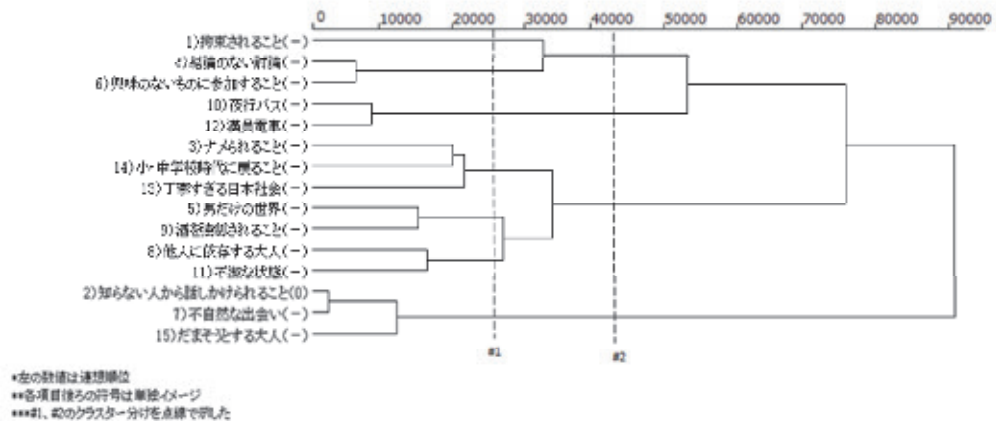


図 1. 事例 A 樹形図

①C1について 『拘束されること(c1)』『結論のない討論(c2)』『興味のないものに参加すること(c2)』

#1: (c1)自由がない感じが、もう耐えがたい。そこから身動きできないような状況。残っても、出て行っても、どっちにしても罪悪感が残るっていうのが嫌ですかね。学校のホームルームとか、なかなか進まない話なのに帰ることができないとか、そういう状況。仕切るっていうのが、そもそも苦手です。なんかうまく具合にまとめていくっていうことができたためしがないので、もう他の人にまかせちゃうんですね。団体行動が苦手なんです。 (c2)身動きできないところ。(結論のない討論は)堂々巡りになるからやらなくていい気もするし、解釈がたくさんある。でもそれをまとめていくとか、たぶん自分がうまくできない。だから、結局自己嫌悪。自然にいいように見せることができないのが、すごい悔しくて。

#2: (C1)前回とちょっと違って一つ思ったことは、こういうことに対する自分の打開策がないということ。「結論のない討論」だったり「興味のないものに参加すること」に対して、自分の意見がないということからくるんじゃないかと思います。自分の言葉で表現することができなくて、それに対して苦痛を感じるんだと思います。上手にというか、なんかいい感じの終わり方に持っていくことが苦手で、そうしたいんだけどできないもどかしさを感じられると思います。/討論とかになると、自分の考えをまとめる必要があると思うんですけど、実はそういうことに、関心がないというか日和見主義というか……傍観者になってる自分がいる。そういう状態になったときに嫌ですね。ここに書いてあることは全部自己嫌悪かもしれない。自分がこういったものに適合できないって。あと、他力本願的なところがあると思う。どうやってこの場を切り抜くかというところを、もっと前向きに考えられるように……嫌な状況でも、何か楽しみを見つけられるような人間になれたらいいなと。傍観者でいるような状態とか、参加できていない状態が、自分の目線で拘束されているって捉えるんだと思います。その場の雰囲気拘束されている。自分がいることで和を乱さないことになる。そうやって自分が思い込ん

でしまうのかもしれない。ひょっとしたら相手はそんなこと求めてないのかもしれないけど。

②C2 について 『夜行バス』『満員電車』(すべて c3)

#1：時間的拘束がきついということと……満員電車は、人と接触する時間が長いのが嫌です。緊張を保ったままではいなきゃいけない。何か取られはしないかとか、女性に触れてはいけないので……そういう配慮をしなくちゃいけない。

#2：窮屈な感じ。苦しい。人が接触していて、油断できない。たくさんの知らない人と隣り合わせの感じ。

③C3 について 『ナメられること(c4)』『小・中学校時代に戻る(c4)』『丁寧すぎる日本社会(c4)』『男だけの世界(c5)』『酒を強制されること(c5)』『他人に依存する大人(c6)』『不潔な状態(c6)』

#1：(c4)フラッシュバックする過去……。〈嫌な思い出?〉そう。心の中では相手を痛めつけたいと思っても、それはいけない。でもそれを気にしないでいることができない自分も嫌。1/アルバイトしてた時、言葉遣いとか礼儀作法とか、細かーいことまで気を遣わなきゃいけなくて。明らかにお客さんの間違いなのにこちらが頭下げなきゃいけない。それをみんなが当然のようにやっている。(c5)どちらも苦手で自分が馴染めないから、めんどくさい。酒が飲めなかったら、世間的に、男としてけっこう恥ずかしい部分ありますよね。〈男だけの世界?〉下品なジョーク、暴力、あんまり気付かないところ。相手を抑圧する感じ。(c6)自分が想像するだけで嫌なもの。自分がこうなりたくないっていうイメージのもの。やっぱりかっこ悪いですよね。(不潔な状態は)自分が我慢できないこと。なんでこんなに散らかしたんだろうとか、なんでこうなる前に何もなかったんだろうみたいな。

#2：(C3)今……思ったのは、こんなに弱点に気付いてるなら、自分は変わらなくちゃいけない。例えばナメられないようにするために自分は変わらないといけない。確かに嫌なんだけれども、自分がやっぱりどうにかしないと、何も解決しない……。あまりにも人付き合いが下手だなんて。小中学校の時は、女子と話す目立っちゃうから男子と話したりもしてたけど、無理してるところもあったなと思います。でも無理していても仕方がないなって、最近気付いてて。自分をさらけ出した方が、相手も違ったスタンスで認めてくれることもあり得るし、その方がいい人間関係が築けると思う。すごく時間がかかったりするけれど、ちゃんと認められるためには、性格を変えるっていうか、合わせるか、もしそれができないなら認められる何かをがんばるか、どっちかしかない。1/自分の周りの人たちは割り切ってるんですよ。だから自分も無頓着なくらいになれたらいいなって。ひょっとしたらここに書かれていることは、余計な心配かもしれない。1/ひとつ、自分の中で結論出したのは、あんまり気にしすぎる人って好かれない。流すくらいで、気に掛けなくらいが自分にはちょうどいいような気がして。その方が、人間関係がうまくいくような気がする。何か目標があって、それに向けて頑張っていて、その比重が8割くらいなのがちょうどいいような気がする。自然な感じ。浪人経験した時、たしかに苦しかったけれども……すごく充実していたし、あの時にできた友人の方が、わかり合えた感じがした。自分が口下手な方なので……頑張っている方が、自然と人間関係が生まれてくるのかなって。自分はそういう性質なのかなって思う。

④C4 について『知らない人から話しかけられること』『不自然な出会い』『だまそうとする大人』（すべて c7）

#1 : (c7)これはもう許せない。知らない人との出会いを求めようとする人たちってほんとに理解できない。顔が見えない、知らない相手に対して、連絡先を交換したり、私こんな人ですみたいなことも言ったりして、関わりを持とうとすることが、不自然だと思う。もっと徐々に、こういう人なんだとわかっていって、相手のことを知るのが自然だと思います。関わりをもつことってそういう出会いで十分だと思うんです。メールアドレスとかを教えた後、なんで断らなかったんだろうって後悔して。別に興味もない人と関わりを持ってしまうと……すごく不安になったり、心配したりしてしまう。自分の名前を、自分の存在っていうものを知らない人に認知させてしまったことがすごく嫌ですね。その人に自分が捕えられているというか、その人の手の届くところに自分がいるみたいな。距離が縮まった感がするのが、すごく嫌。

#2 : (C4)自分がこうなりたくないと思うし、(そういうことをする人に対して)恥を知れって思う。……ちょっとこの前とちがうのは、知らない人から話しかけるっていうのは致し方ない場合もあるし、状況にも……ほんとに道とかわからなかったら聞かなくちゃ仕方ないですよね。

(2)クラスター間の比較

①C1 と C2 の比較

体が拘束されるという点、言動を控えなくちゃいけないという点、緊張感を保つとかなきゃいけないというのが似ている。色んな人の中で自分が目立っちゃいけない。恥ずかしい行動をとっちゃいけない。だらっとしてはいけないみたいな感じ。

②C1 と C3 の比較

どちらも建前の自分。素の状態を出しちゃいけない自分がいる。違うのは、C1 の状況だと、自分が相手にどう思われてるかが定かでない。C3 は、もうナメられてしまってるとか、その一歩前の段階の、隙を与える状態まできてる。だから C3 の方が、自分の身を守るという点ではリスクがある。

③C1 と C4 の比較

C4 みたいな部分は、自分の中にいない。でも C1 にはどんぴしゃな自分がいる。C1 は自分に対する嫌悪で、C4 は他人に対する嫌悪。

④C2 と C3 の比較

自分が苦手だと思う人、例えばマナーが無い人とかに会える可能性があるという点が似てます。そういう時に、自分が注意できないんですよね。そういう人に、自分の言うことを聞いてもらえとは思えないって、自分で思ってしまうところもあると思う。

⑤C2 と C4 の比較

C2 は自分が何も喋らず、我慢すればいい状況だけれど C4 では対話が発生してしまう。C2 だと自分が知られなくてもいいけども、C4 だと、自分という存在に関わろうとしてくる。全然違います。

⑥C3 と C4 の比較

自分に隙があるところが似てる。自分の長所は人当たりのいいところだと思うんですけど、そ

の反面、人にナメられるところがあつて。

(3) クラスターの連結、イメージ構造全体についての解釈

① C1 と C2 の連結

体が拘束されるという点でくっついた。

② C1、C2、C3 の連結

建前の自分がいるという点、人間関係を構築していかなくちゃいけないという点、素の自分を見せられないということで似てます。見せてしまうと、隙を与えてしまったり、変な人っていうレッテルを貼られてしまったりする。人と人とのやりとりはうわべのような気がする。自分だけじゃなくて、みんなが仮面をかぶっている。だって、全部本音だと大変なことになるから。こういうことって日常茶飯事だと思うんですけど、みんなこういう(素の自分を見せる)状況を楽しんでいるのかな。そういうのが当たり前だという風に思ってる人もいるのかな。そこに入り込むだけでもけっこう大変で不安なんですけれども……でもきつこういったところで鍛えられて、みんなコミュニケーション能力が上がっていくんだなって。自分は気にするポイントがちよっとずれてるんだと思う。プレッシャーがあるところが共通。素の自分を見せれないっていうプレッシャーが……。ここらへん(『男だけの世界』『酒』)は、人の気が緩んでるところだと思う。でも、相手がせつかく気を許してくれているのに、期待に応えられないというか……。こういった状況の後で、疎遠になるケースもあったんです。いっそのこと、最初から関わらないことができればよかったなっていうことがあった。プライベートなものを始めるときって、けっこう緊張します。自分は隙間からのぞくように、人を選んでいく。

③ 樹形図全体のイメージ

捕えられちゃった感じ。社会に馴染んでいない自分。いやな状態になる時って、やっぱり人に見られちゃった時だと思う。人に見られて、こういった状況が起こるとき。逆に言えば、誰も見てないから、自分一人である方が安心。一人でいすぎるのも嫌ですけどね。(どうして見られたくないのですか?) やっぱ自分に自信がないとか、自分にコンプレックスがあるとか、そういった状態からもくとも思いますし、自分に自信があったら、もっと見て見てって感じになるかもしれない。

V. 考察

1. A の「いやなもの」のイメージ構造

A 自身が語ったイメージや解釈をもとに、各クラスターについて考察を加える。

1) C1 『拘束されること』『結論のない討論』『興味のないものに参加すること』

C1 では、集団場面の中での居心地の悪さ、身動きの取れなさというイメージが語られた。その場に参加できず、傍観者としてしかいられない苦痛を感じているにもかかわらず、「和を乱す」ことを恐れてそこから出て行くことができない葛藤状態を表していると考えられる。

2) C2 『夜行バス』『満員電車』

C2 では、自分の体や時間が束縛されるというイメージが語られた。そこから更に、「何か取られはしないか」、「油断できない」と報告されたことからわかるように、他者との接触に伴う不安や緊張感を表して

いると考えられる。

3)C3 『ナメられること』『小・中学校時代に戻る』『丁寧すぎる日本社会』『男だけの世界』『酒を強制されること』『他人に依存する大人』『不潔な状態』

C3 では、屈辱的な体験や、A 自身がなじめなさを感じている集団、そして A 自身が「なりたくない」と感じているものについて報告され、最終的にこれらは A の「弱点」を表していると語られた。このクラスターに属する項目は、「ナメられる」というイメージで結びついていると考えられる。A にとって「かっこ悪い」、「自分がなりたくないもの」になってしまうと、相手に「ナメられる」隙を与えてしまうことになり、それによって自分が相手にねじふせられてしまうことの不安がこのクラスターに表れていると考えられる。

4)C4 『知らない人から話しかけられること』『不自然な出会い』『だまそうとする大人』

C4 では、「許せない」、「理解できない」という強い拒否感が報告された。A にとっては、他者と場を共にする中で、徐々に相手のことがわかっていくことが「自然な流れ」であるため、相手のことをよく知らない状態で、名前や性格など自分の存在の根幹に関わる情報を相手に与えてしまうのは「ぞっとする」ほどのことである。自分を「だまそうとする」かもしれない人間に、自分という存在が認知されてしまい、意に反して距離が縮まってしまうことで、相手に一方的に捉えられてしまうような不安を感じるのである。ここでは、他者の方から自分に近づいてくることへの不安が表れていると考えられる。

2. A の「いやなもの」とは

C1 から C4 までのクラスターに付加された解釈を通して、A の「いやなもの」はどのようなものなのか、その特徴について考察する。

A の「いやなもの」の語りの中には「相手」すなわち「他者」の存在がしばしば登場し、「他者との関係の持ち方」という文脈の中で「自分」のことが語られる。つまり、A の「いやなもの」には「自分」と「他者」という問題が関係していると考えられる。C1 での「他者」は、A の入れない集団を形成しているが、まだ A に対して否定的な感情は抱いていない。それに対して A は「和を乱さないように」と思い、「目立っちゃいけない」「変な自分を見せちゃいけない」と、自分がその場から浮いてしまわないように振舞う。しかし、その集団の中に入ってはいけず、「傍観者」としてそこに居るしかない。C2 での「他者」は電車やバスの中にいる不特定多数の見知らぬ人たちである。A は相手に触れないように注意を払いながら、その場にいる。そうすれば、周囲の人たちの関心が自分に向けられることはない。C3 での「他者」は、自分をねじふせるような力をもっており、隙を見せると自分が「ナメられ」てしまうかもしれない。そのような「他者」は自分の「弱点」なので、A は自分が変化する必要性を感じている。そして C4 でイメージされる「他者」は、A には全く理解のできない、受け入れがたい他者である。A にとっては未知の存在だが、相手は自分のことを「認知」していて、A を目指して近づいてくるものである。

一方、「自分」については、「素の自分の見せられなさ」が繰り返し語られる。A は「素の自分」に対して自信がなく、「変な風に思われるんじゃないか」という思いを抱いている。これは、自分にとって自然なことであった「女の子とよく話す」という行動が、周囲の好奇の目に晒され、「ナメられる」体験となったこと(C3)に関連すると推察される。おそらく、この体験を起源の一端として、A にとって「素」の自分を人目に晒すこと、つまり「自然な自分」を出すことは、「相手が自分をナメる」ことになる「隙」を作ってしまう可能性をもつこととして位置づけられたのだろう。相手に「ナメられる」とときには、まず自分が相手に一人の対象として認識されるということが起こる。よって A は、不特定多数の見知らぬ人の中という状況におい

ては目立たないよう、「他者」に触れないように注意を払う。坂部(1976)は、「ふれる」ことは「ふれ合う」ことであり、「自－他」の区別を超えた原初の経験である」と述べているが、「自分」が「他者」に「触れる」ことは同時に、「自分」が「他者」に「触れられる」ことである。つまり、「自分」が相手を意識すると同時に、「自分」の存在が相手に意識される。A が「他者」に「触れないように」気を配る意味がここに見出される。また、まだ相手が自分のことをどう思っているかわからない場では、自分が相手に悪い印象を与えないように、自分の気持ちに反してそこに留まろうとする。それは、自分がその場の和を乱すことによって、自分の存在が目立ってしまうことを防ぐためでもある。しかし、自分の言葉で表現できず、傍観者としてその場にとどまる状況は同時に苦痛も生んでいる。また、相手が自分のことを「個」として認識している場では、身を守らねばならない「リスク」はいつそう高まる。「男だけの世界」とイメージされたような場では、「建前」ではなく「素」の自分として相手と対峙することが期待されるからである。A にとって「素」を見せることは「隙を見せる」ことにつながるため、そのような「期待には応えられない」。しかし、そのことは相手と「疎遠になる」ことにつながるため、そこでも葛藤が生じてしまう。このように、「自分」と「他者」との関係というテーマが、どのクラスターにも共通して表れている。

A は樹形図全体から「捕らえられちゃった感じ」がし、「いやな状態になるときは、人に見られちゃったとき」であると語った。A の「いやなもの」とは自分一人の中で完結し、生じるのではなく、他者の眼前に自分の姿が晒され、自らが相手の目にふれた時、つまり他者とのつながりが生じようとするその時に生まれるものであるのだろう。A が「自然な自分」として振舞うことを阻むものは、他者の目であり、複数の他者によって作られる集団の雰囲気であり、その目に映った時に身動きが取れなくなってしまう自分自身ではないだろうか。A の「いやなもの」は、“「自分」を傷つけるかもしれない「他者」との出会い”だと考えられる。そして、その「いやなもの」の根底には、「他者とつながりたいけれど、おそろしい」、「建前の自分の方が安全だけれど、素の自分を出したい」というアンビバレンスがある。A の「いやなもの」は、A が他者やそれを含む周囲の世界とどのように関わっていくかというテーマを示しているといえる。

3. イメージ構造の変化について

#1と#2の間で、イメージ構造に変化がみられた C1 と C3 の 2 クラスターについて、考察する。まず C1 について、#1 では A が「身動きできない」と感じる状況の描写と、「うまくまとめられない」「団体行動が苦手」など自分自身についてのイメージが、断片的に語られた。一方、#2 では一步踏み込み、身動きの取れなさ、A 自身が「自分の言葉で表現すること」ができず、「打開策がない」ことに由来して、そのために、A はその場において「傍観者」でいるしかなく、それが苦痛なのだと語られた。つまり、語りの主軸が「いやなもの」そのものから、自分自身へと移ったといえる。また、自分を中心として語ることで、自分には「他力本願的なところがある」ことや、自分がその場にいることで和を乱さないことになると思ひこんでしまうのかもしれない」という自己理解が生まれていた。次に、C3 では、外傷的な体験(c4)、男性の世界になじめないこと(c5)、自分になりたいくないもの(c6)というように、#1 では断片的だった「いやなもの」が、#2 において自分の「弱点」として統合された。そして、それらが「弱点」であるという認識から出発し、「変わらなくちゃ」と自分自身の変化への望みが芽生えた。変化するために「性格を変えるか」、「認められる何かを頑張るか」と選択肢を自ら考え出し、解釈の過程の中で「流すくらいで、気に掛けない」、「目標に向けて頑張って、比重が 8 割くらいがいい」など、自分にとって無理なく「ちょうどいい」と感じられるあり方にたどり着いた。「素の自分」を他者に見せることが困難な A がその不安を乗り越え、

「ちようにいい」と感じられる程度に「素の自分をさらけ出す」方法を模索していたともいえる。ここから、「いやなもの」のイメージ構造が変化する、つまり「いやなもの」の捉えられ方が変化する時、個人の視点は外側に投げ出された「いやなもの」ではなく、自分自身へと向けられ、それによって自分のネガティブな側面に対する気づきが生じ、「自分」と「他者」の違いに目が向けられたり、「自分らしさ」がクローズアップされたりする中で、自己理解が深まっていく。その動きの中で、変化を志向したり、自ら変化するために具体的手段を模索する動きが生じていくと考えられる。

まとめ

本研究では、「いやなもの」をテーマとし、①個人の「いやなもの」はどのようなイメージ構造をしているのか、②「いやなもの」はどのようなテーマを表現しているのか、③「いやなもの」の捉え方に変化が生じる時、個人の心の中ではどのような動きが生じているのかという3点について考察することを目的としていた。PAC分析を用いたAの事例検討からは、「いやなもの」の中には「自分」と「他者」との関係というテーマが表現されているということが確認された。さらに、「いやなもの」のイメージ構造が変化したクラスターからは、「いやなもの」の捉え方が変化する時、外側の対象に向けられていた視点が自分へと向けられ、それによって自分の弱点や苦手なものに対する気づきが生じ、自分自身のあり方についての理解が促進されるということが見出された。その動きの中で、「自分」と「他者」との関係やその特徴への理解が深まり、変化を望んだり、そのための手段を探ろうとする動きが語り手の中に生じているということが示唆された。

「いやなもの」とは個人の生活史やパーソナリティ、その他の様々な要因が反映された、個性性を強く帯びたことである。したがって、本論の結果・考察において示したような「自分」と「他者」との関係というテーマが、あらゆる人の「いやなもの」の中に表現されていると断定することはできない。しかし、「いやなもの」とそれにまつわる語りの中に、語り手自身のテーマが表現されていることが確認できたということに、本研究の意義が認められるということができよう。そもそも「いやなもの」とは、個人にとって受け入れがたい内容が外界に投影されたものであるという前提に立ってみれば、「いやなもの」を語る取り組み自体が「自分」と「異物」、つまり「自分」と「他者」が関わる営みそのものだとも考えられ、「いやなもの」の語りが「自分」と「他者」との関わりというテーマに収束していくことは必然的だと考えることもできる。「いやなもの」の語りが他にどのようなテーマを内包しているのかについて、新たな事例検討の必要性があるだろう。また、今回用いたPAC分析では、被検者が、自らの内界が外在化されたクラスター構造についてのイメージや解釈を、検査者とともに探索し、語り、意味付けしていくという手続きが取られたが、これは内藤(2008)の指摘するように、まさに心理療法的なプロセスといえる。本来ならば、「いやなもの」の捉え方はそう簡単に変化するものではないだろう。しかし、このような心理療法的な側面をもった手法が、「いやなもの」のイメージ構造の変化や、Aの自己理解を促進させた可能性もある。このことを鑑みると、心理療法において、クライアントがどうしても受け入れがたい自らの一部に苦悩するとき、セラピストがその「いやなもの」を傍らでクライアントと共に眺め、語りを聴き、クライアント自身による意味付けの営みを支えていくことが、やがてはクライアントの自己理解や変容につながっていくという可能性がたしかに示されたともいえる。「いやなもの」を見つめることは、大きな苦痛を伴う。それを理解した上で、その苦痛を受け止めながらクライアントを支えていくという姿勢がセラピストに強く求められるものであるということを、今一度意識せねばならない。

謝辞

本論文は平成 22 年度に京都大学教育学部教育学研究科に修士論文として提出したものを、大幅に修正したものです。調査に協力くださった方々、執筆にあたりご指導賜りました桑原知子教授、そしてご意見を下さった方々に心よりお礼申し上げます。

文献

- 井上孝代(1998). カウンセリングにおける PAC(個人別態度構造)分析の効果. 心理学研究, 69, 4, 295-30.
- 荻野恒一(1978). 自己嫌悪のすすめ. 青年心理, 9, 418-426. 金子書房.
- Freud, S. (1926). *Hemmung, Symptom und Angst*. 井村恒郎, 小此木啓吾他訳(1970) 制止、症状、不安(フロイト著作集第 6 巻 自我論・不安本能論). 人文書院.
- Jung, C. G. (1951). *Aion*, CW9ii. 野田倬訳(1990)アイオーン(ユング・コレクション 4). 人文書院
- 河合隼雄(1967). ユング心理学入門. 培風館.
- 水間玲子(1996). 自己嫌悪感尺度の作成. 教育心理学研究, 44, 296-302.
- 水間玲子(2003). 自己嫌悪感と自己形成の関係について—自己嫌悪場面で喚起される自己変容の志向に注目して—. 教育心理学研究, 51, 43-52.
- 内藤哲雄(1993). 個人別態度構造の分析について. 人文科学論集, 27, 43-49.
- 内藤哲雄(1994). 性の欲求と行動の個人別態度構造分析. 実験社会心理学研究, 34, 129-140.
- 内藤哲雄(1997). PAC 分析実施法入門 [改訂版] 「個を」科学する新技法への招待. ナカニシヤ出版.
- 内藤哲雄(2008). PAC 分析を効果的に利用するために. 人文科学論集(信州大学人文学部), 42, 15-37.
- 長田京子・岩男征樹・堀洋道(1998). 患者の死が看護学生の死生観と看護観に与えた影響—3 事例への PAC 分析への適用—. 教育相談研究, 36, 29-39.
- 坂部恵(1976). 仮面の解釈学. 東京大学出版会.
- 駿地眞由美(2006). 「遺伝子」「遺伝」に対するイメージ研究②—PAC 分析—:『遺伝子診療における心理的援助に関する研究』(課題番号: 15330148, 平成 15~17 年度 文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 B 研究報告書, 研究代表者: 伊藤良子
- 土田義郎(2008). PAC 分析支援ツール ver.20080324 .
<http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-asist.htm>
- 山中康裕(1978). 思春期内閉—治療実践からみた内閉神経症(いわゆる学校恐怖症)の精神病理—. 中井久夫・山中康裕思春期の精神病理と治療. 岩崎学術出版社.

(心理臨床学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿 2013 年 9 月 2 日、受理 2013 年 11 月 28 日)

A Psychological Study of “Dislikes” Using PAC Analysis through the Examination of a Case

IWAKI Akiko

In this study, “dislikes” was chosen as a theme. One’s “dislikes” should be understood as a “window ” through which to understand one’s personal mind. The purpose of this study is to make clear the structure of the image about “dislikes” to confirm that “dislikes” could be used as a “window”, and it narrates the psychological theme of the “one”. Through an investigation of the case of a 25-year-old male, using personal attitude construction analysis, it was revealed that his “dislikes” showed he had a problem with and fear of constructing intimate relationships. However, the structure of his dislikes changed between two sessions, which suggests that when the structure of “dislikes” changes, the narrator focuses more on himself, which leads him to a new self-understanding.